

Title	<雑録>山西旅行の収穫
Author(s)	小野
Citation	東洋史研究 (1942), 7(4): 256-256
Issue Date	1942-08-31
URL	https://doi.org/10.14989/145765
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

び蒙古文の巴林橋修理碑二方を置く。俱に高さ七尺、寛さ三尺許。

とある蒙古文碑に當るのではなからうか。土木局の人達の努力でこの碑が湮滅から免れえた事は幸である。

また應昌城址には兩斷された「新建備學記」碑が桑原博士等の訪ねられた時と同じく草榛の間に放置されたまゝにあることを須佐氏の見聞録によつて知られる。たゞこの見聞録に「筆者の今迄知る限り學界の人々で此の地(應昌城)を訪

ねたことを聞かない」とあるが、須佐氏に先だつ三十年前に學界の第一人者によつて探訪されてゐるのである。桑原博士の「東蒙古紀行」が古い歴史地理誌に掲載され須佐氏の如く滿蒙史研究の専門家の眼にすら觸れにくくなつてゐたことは誠に遺憾の極みであつた。その意味からもこの度、桑原博士の支那蒙古旅行記が纏まつた單行本として見易くなつたことは學界の至幸といはねばならぬ。(森 附記)

山西旅行の收穫

去る二十七日に、北京にもどりました。晉南の旅はかなり期待が大きかつただけに悲觀し、晉北の旅は初めから大した希望もなかつた、それだけに元遠の故址や李克用の墓、さては七巖山へ行くことが出来たのはうれしいことでした。城は繁峙故城、廣武縣城、原平縣址? (今の原平附近は矢張り漢の遺跡地です)、醇の石城等。定襄には一週餘滞在しましたが、あまり新しい事實はつきとめ得ずたゞ地圖でもうまく出来れば甚だ幸です。七巖山では八路に狙撃を受け大いにあわてたです。太

原で暑氣にあたり、大同へ廻ることが出来ませんでした。七月二日(小野勝年氏より日比野宛)

惠遠の故址といふのは白仁巖寺のことで、地志によれば、代州の西北三十四里、白仁巖といふ巨石の上にあります、惠遠が創建したといはれる寺である。一明の重建にかゝり、今はたゞ乾隆の碑があるのみで他に古物はないやうに思ふ。七巖山とは定襄縣の東南にある名山で、山に七洞があるのでその名が生じたといはれる。今は代

王夫人を祀るといふ聖母祠があるが六朝から唐にかけては佛寺として祭えたとみえ、六朝の造像などももの本には若干著録されてゐる。燕覺大師も、五臺山の歸途定襄縣七巖寺に泊つたことが巡禮行記にみえる。繁峙故城は、今の縣城の東にあり、北魏より隋初に至る間のもの。原平縣址は今の原平鎮の北方にある漢の故城である。醇の石城といふのは後魏の石城縣で、地志によると今日の醇縣治が即ちそれであると記してゐるが、或はまた別にその故址があるのであらう。(日比野附記)